

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24730705

研究課題名(和文) 開発途上国の基礎教育における留年・退学の包括的な要因分析

研究課題名(英文) Comprehensive Factor Analysis of Repetition and Dropout in Basic Education of the Developing Countries

研究代表者

石坂 広樹 (Ishizaka, Hiroki)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：20537493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、生徒・家庭・学校という3つの領域の要因を同時・包括的に分析することで、留年・退学を解消する教育政策の新たな可能性について検討することを目的とした。本研究では、関連資料収集、アンケート調査、インタビュー調査、学校観察などを実施した。対象国は、コスタリカ・ホンジュラス・フィリピン・ガーナ・シエラレオネ・ルワンダ・ラオスとなった。不登校傾向・留年・退学などの要因としては、間接的であれ、学費の支払いだけでなく、学校にまつわる課題、例えば、学習に対する不安、学習動機、ストレス、保護者・クラスメート・教師との信頼関係などがあげられた。国によって傾向に差はあるものの、同様の傾向が確認された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to consider a new possibility of educational policy for alleviating repetition and dropout, by analyzing comprehensive and simultaneously three areas of factor such as students, family and school. This study collects data and documents related to the issue, carries out questionnaire survey, interview and school observations. The target countries were Costa Rica, Honduras, Philippines, Ghana, Sierra Leone, Rwanda and Laos. According to the findings of study, there is a possibility that, no matter how indirect, factors for school avoidance, repetition, dropout were payment of tuition fee, issues around school such as anxiety about learning, stress, reliability to parents, classmates and teachers. Even though there confirmed some differences among the target countries, similar tendencies were detected there.

研究分野：教育政策

キーワード：留年・退学 不登校

1. 研究開始当初の背景

(1) 自著(石坂 2009; Ishizaka 2011)において、シエラレオネやコスタリカで行われたアンケート調査結果に鑑み、これまで指摘されてきた家庭の社会・経済的格差のみならず、学校で行われている教育の質が生徒の留年・退学に大きな影響を及ぼしている可能性について指摘した。

(2) これまで実施されてきている奨学金給付・学校施設整備といった、アウトプット型の目に見えやすい政策だけでなく、教育の質に直接的な影響を及ぼしうるアウトカム型の政策として教員研修や父母の学校運営への参加の推進などが必要になると結論付けてきた。

(3) 近年の研究の中には、社会・経済的格差の中身について詳細に分析するものや社会的・経済的格差という学校の外側の要因だけでなく、学校内の要因や生徒自身のもつ性格・志向に関する研究が増えてきていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究においては、生徒・家庭・学校という3つの領域から同時・総合的に考察することで、包括的な要因分析を図り、留年・退学の解消を目指した教育政策の新たな可能性について検討することを目的とした。

(2) 本研究は、従来行われてきた留年・退学の要因に関する研究成果を取りまとめるとともに、独自に要因に関する総合的な実地研究・調査を行うことで、バランスのとれた要因特定と、長期的・包括的な政策提言を可能にするという特色を持っている。

3. 研究の方法

(1) 調査方法

本研究では、関連資料収集とともに、アンケート調査、インタビュー調査、学校観察などを実施した。対象国は、コスタリカ・ホンジュラス・フィリピン・ガーナ・シエラレオネ・ルワンダ・ラオスの7か国となった。アンケートでは、心理尺度(表1参照)として、不登校傾向(SAFS)、学習動機傾向(AGTS)、自己有用感(SUS)、数学(算数)不安(MAS)、ストレス反応(SRS)、英語学習不安(ELCAS)、両親信頼度(TPS)を採用し、不登校傾向にある生徒の心理面の状況を把握するとともに、家庭環境・学校環境に関する属性、学校や家庭での問題についても質問した。インタビュー調査では、学校を休んだり中退した生徒にその理由を聞く調査を行った。

(2) 分析方法

得られた心理尺度データの因子自体の傾向、因子間や尺度間の相関関係について分析するだけでなく、生徒の属性グループでの因子・尺度得点の違いについて分析を加えた。また、オープンエンドなアンケート質問やインタビュー回答については、コーディングや単語の頻出度・関係性について分析を加えた。

表1: 適用した心理尺度の信頼係数

| Scale name | Item number | Cronbach (α) |
|--|-------------|--------------|
| "School Avoidance Feeling Scale (SAFS)" | 26 | 0.767 |
| "Achievement Goal Tendency Scale (AGTS)" | 18 | 0.764 |
| "Self-Usefulness Scale (SUS)" | 27 | 0.833 |
| "Mathematics Anxiety Scale (MAS)" | 18 | 0.823 |
| "Stress Response Scale (SRS)" | 16 | 0.916 |
| "English Language Classroom Anxiety Scale (ELCAS)" | 31 | 0.873 |
| "Trust-in-Parents Scale (mother) (TPSM)" | 8 | 0.814 |
| "Trust-in-Parents Scale (father) (TPSF)" | 8 | 0.846 |

4. 研究成果

(1) ガーナやシエラレオネにおいては、不登校傾向と学習動機の低さの間に相関関係があることが分かった。

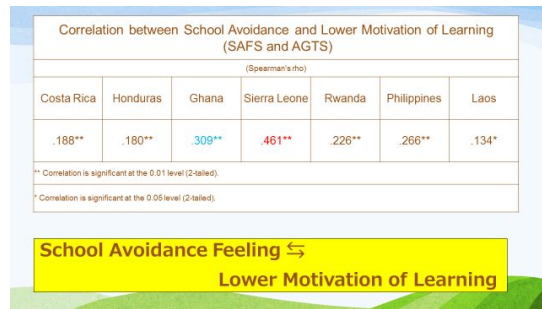


図1: 不登校傾向と学習動機の低さとの関係

(2) 多くの調査対象国において学校を尊敬できない・学校が嫌いであるという傾向と学習動機の低さの間に相関関係があることが分かった。

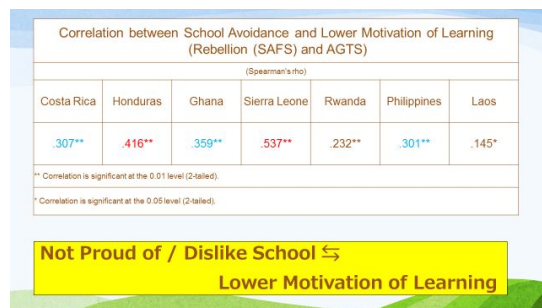


図2: 不登校傾向と学習動機傾向との関係

(3) コスタリカやホンジュラスにおいて、不登校傾向と自己有用感の低さとの間に相関関係が確認された。

(4) コスタリカ、ホンジュラス、ラオスにおいては、学習動機の低さと自己有用感の低さとの間に相関関係が確認された。

(5) ガーナとシエラレオネにおいて、ストレス反応の強さと不登校傾向・英語学習不安との間に相関関係が確認された。

(6) ガーナやシエラレオネにおいては、不登校傾向と直接相関関係があるものの多くが英語や数学などに対する学習不安や学習動機傾向であった。また、両親との信頼関係と学習動機との間にも相関関係が確認された。また、ストレス反応と不登校傾向との間の相関関係も強く、ストレス反応と両親との信頼関係の低さとの間の相関関係もあることから、間接的に家庭環境と不登校傾向との間の関係性が推測された。

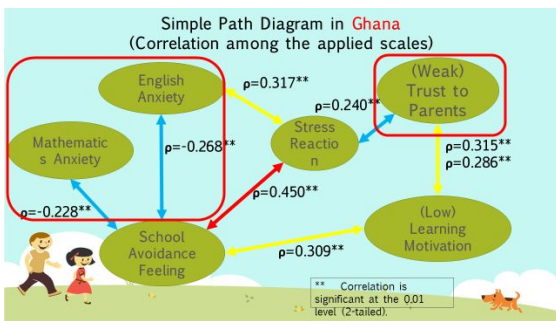


図3：ガーナにおける心理尺度間の関係

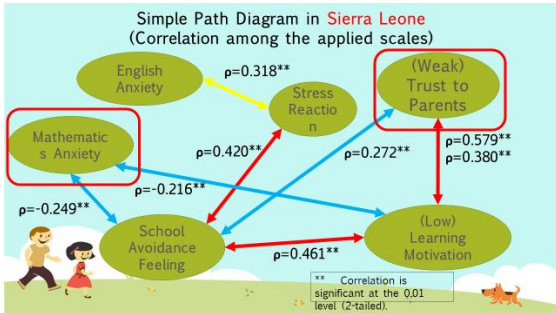


図4：シエラレオネでの心理尺度間の関係

(7) ガーナやシエラレオネにおいては、学年が上がるに従って、不登校傾向が下がる一方でストレス反応が高まることが分かっており、不登校傾向の高い生徒が学校から離れている可能性や学習が高度化することでのストレスが大きくなっている可能性がみとれた。

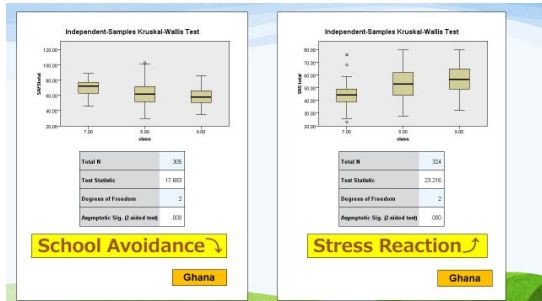


図5：ガーナでの学年別の傾向の差

(8) フィリピンにおいても学年が上がるに従って不登校傾向が低くなる他、学習動機が高まることが分かっている。不登校傾向の高い生徒が学校から去る中で、モチベーションの高い者が残っている可能性がある。

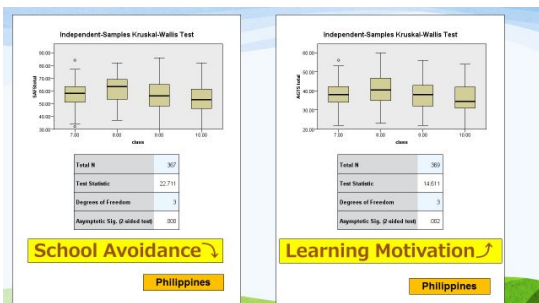


図6：フィリピンでの学年別の傾向の差

(9) コスタリカにおいては、実際に不登校

となった経験のある生徒のほうが、学校を避けたい気持ちが強く、学習動機が低い傾向があることが分かった。

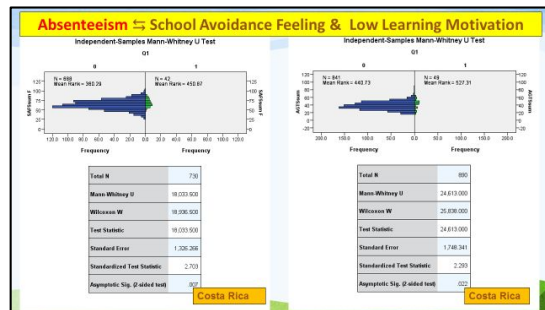


図7：コスタリカでの不登校児の心理傾向

(10) ホンジュラスにおいても、留年した経験のある生徒のほうが、学校を避けたい気持ちが強く、クラスメートに対する自己有用感が低い傾向が確認された。

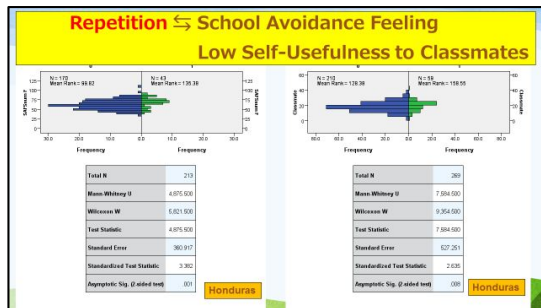


図8：ホンジュラスでの留年者の心理傾向

(11) ガーナ及びシエラレオネで実施したアンケート及びインタビュー調査によれば、学費の支払いについての保護者の影響、妊娠、教師による体罰、クラスメートによるいじめ・カンニングなどが学校にかかわる課題として指摘されていた。

(12) 以上の通り、不登校傾向・留年・退学などの事情にまつわる要因としては、学費の支払いだけでなく、学校にまつわる課題、例えば、学習に対する不安、学習動機、ストレス、保護者との信頼関係、クラスメートや教師との信頼関係などが間接的であれかわりを持っている可能性が分かった。国によって傾向に差はあるものの、同様の傾向が確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Hiroki Ishizaka 2017. An Analysis of Anxiety and Other Issues Faced by Junior High School Students in Ghana -Contrasting it with Some Aspects of Phillipian Case-, NUE Journal of International Educational Cooperation, Volume 10. (no peer-reviewed) 61-73.

〔学会発表〕(計4件)

Hiroki Ishizaka, Comparative Analysis on Secondary School Students' School Avoidance Tendency and Motivation of Learning, 日本比較教育学会, 2016.6.26, 大阪大学(大阪府・吹田市)

Hiroki Ishizaka, ¿Podimos enfrentar bien deserción educativa y repitencia en secundaria? Latin American Studies Association, 2016.5.27, New York (USA)

Hideyuki Akai, Takeshi Sakai, Kazuyuki Tamura, Hiroki Ishizaka, A Study on Students' Mathematical Difficulties in Philippines, International Society for Mathematics and Science Education, 2014.12.28, Vientiane(Laos PDR)

Hiroki Ishizaka, An Analysis on Issues Junior High School Students in Ghana Face and Their Social Awareness, 日本比較教育学会, 2014.7.13, 名古屋大学(愛知県・名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石坂 広樹 (ISHIZAKA, Hiroki)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：20537493

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし